昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七四号）

慈光

第二十四巻　第三号

目次

懺悔録（結び）……近角常観……(1)
一道会の記（二）……榊原徳草……(5)
菅瀬芳英先生を憶う……西本清人……(11)
噫、歎異抄の九章……松村繁雄……(15)
念仏詩抄……木村無相……(18)
信味点滴……花田正夫……(20)

懺悔録（結）

近角常観

第七章　結　論

最後に至りて、特に諸君の注意を促すべき事がある。そも〳〵以上叙述し来りたる阿闍世王が無根の信を生ずるに至りたる涅槃経の所説はいかにも生ける懺悔の標本とも云いつべきものである。而して何人が此の如きの文字に着眼したかを注意せねばならぬ。この文字は、親鸞聖人が、自己の信仰を以て真実と名づけ、その根本の書として選述されたる「教行信証」六巻の内、殊にその中心とも称すべき「信」の巻の最後に於いて、永々と引用されたる次第である。先ず初めに、聖人自己の胸中を披握（ひれき）して、熱誠なる懺悔をささげて曰く。

誠に知んぬ、悲しいかな愚禿釈の鸞。愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚（じようじゆ）の数に入ることを喜ばず、真証（しんしょう）の証に近づくことを快（たの）しまず、慙（は）ずべく傷むべきものかな。

と。かく簡潔なる文字は、奥深き意義のこもりたる文字を冠（かむ）らせて、直に引用したまいたるが、即この涅槃経の文字である。私はひそかに考うるに、如何にもこの語気が、阿闍世王の懺悔を以て、聖人自己の懺悔に代えられたるが如く、感ぜざるを得ぬのである。全体西洋などに於いては、懺悔とか告白とか称して、自己の信仰経歴をうつし出すことがあるが、仏教に於いてはこの種のものは無いかと考えていたが、実に親鸞聖人のなされ方は、此の如く不言の間に、自己心中を披握されたものらしい。此の如く実験の事実に依らずんば、また救済の利益は顕（あらわ）れぬ。病ありて初めて薬の力を顕すが如し。故にこの涅槃経の文字を引用しおわりて、其の結文（けつぶん）に曰く。

ここを以て今大聖の真説によるに、難化（なんけ）の三機難治（なんじ）の三病は、大悲の弘誓をたのみ利他の信海に帰せよ。これを矜哀（こうあり）しこれを憐愍したまう。喻えば醍醐（だいご）の妙薬の一切の

病を療するが如し。浊世の庶類（しよるい）穢悪（えあく）の群生は、金剛不壊の真信を求念（ぐねん）すべく、本願醍醐の妙薬を執持（しゆうじ）すべきなり。応（まさ）に知るべし。

実にこれ実験的信仰をあらわされたる生ける如き文字である。本願醍醐の妙薬とは、如何にも適切なる言葉である。そも〳〵醍醐なる語は、涅槃経に於ける五味（ごみ）のたとえより出でている。五味のたとえと云うは、牛より乳を出だす、乳より酪（らく）を出だす、酪より生蘇（しようそ）を出だす、生蘇より熟蘇（じゆくそ）を出だす。熟蘇より醍醐を出だす。醍醐最上なり。若し服することあるものは、衆病みな除こる。あらゆるもろ〳〵の薬は悉くその中に入るが如し。善男子、仏もかくの如し。仏より十二部経を出だす、十二部経より修多羅（しゆたら）を出だす、修多羅より方等経（ほうとうきょう）を出だす、方等経より般若波羅密（はんにやはらみつ）を出だす、般若波羅密より大涅槃（だいねはん）を出だす。なおし醍醐の如し。醍醐というは仏性にたとう。

仏性は即ちこれ如来なり。善男子、かくのごときの義のゆえに、説きて如来所有（しよう）の功徳、無量無辺、不可称計とのたまえり。

といえる経説である。古来天台家等に於いては之を五時八教の教判（きようはん）などにあてはめて解釈することなれども、これは其のように理屈的に解釈しては味がない。明らかに譬にあらわせる如く、仏の直接に説法したまいたる、御説話は牛の乳のようなものである。その十二部経より、後代の文字にあらわれたる契経（かいきょう）を生じたのである。これあたかも乳をかためて酪とした如きである。しかるに其の契経を味わいて、諸仏浄土の広大なる霊界を描き出だしたるは、あたかも酪を煮て生蘇を造り出したようなものである。而してその霊界の中より、般若（はんにや）の真智を練り出したるは、あたかも生蘇を煮込んで熟蘇を生じたようなものである。しかるにその絶対の真智を結晶せしめて、涅槃寂静（ねはんじやくじょう）の歓喜愛楽（かんきあいきょう）の境界の味わいを与えて下さるのは、あたかも熟蘇を遂に精製完成して、醍醐の妙味を造り出だしたる如くであるという譬喩（たとえ）である。此の如く実に一代仏教の精髄が、結晶され、凝結（ぎようけつ）して、涅槃寂静歓喜愛楽の醍醐を生じたという、至極実験の味をあらわしたたとえである。而して親鸞聖人の見地よりして見れば、涅槃経一部に説きあらわしてある涅槃寂静歓喜愛楽の醍醐の妙薬は、すなわちこれ阿闍世がまのあたり味わいたる金剛不壊の真信、弥陀本願の慈愛のかたまりなりといえる御考である。かくの如く思い切ったる断言は、之を実験したる聖人に非ずんば、到底能わ

ぬことと、讃仰するの外はない。

此の如く叙述し来れば、観経に於ける韋提希夫人の得忍（とくにん）涅槃経に於ける阿闍世王の獲信は、実に実験の濫觴（らんしよう）である。而も煩悶を極めたる女性、逆悪を極めたる罪人の、救済を得たる起源である。故に実験の見地に立てる親鸞聖人は、この事実を以て実に深き意味あるものとなし、仏法の大なる願力も、此の王舎城（おうしやじよう）の悲劇ありて、初めて其の救済力を実現し来たりたるものと感歎せらるる。而して王舎城に於ける悲劇は、即ち人生に於ける悲劇にして、いやしくも人間のあらん限り、必ず常に反覆さるべき事実である。たとい吾人は、歴史的に之を実現せずといえども、内心の実験としては、念々刻々、常にかくの如き悲劇を、人生の上に演じつつある次第である。此の如きの人生、此の如き吾人が、無根信（むこんしん）を生じて大安心を得らるる所以のもの、実に仏在世における王舎城の悲劇によりて示されたものである。故に親鸞聖人の眼中に映ずる王舎城の悲劇は、ただ一時の渺（びよう）たる歴史上の一事実に非ずして、心霊上の一大事実である。

故に親鸞聖人は「教行信証」の総序（そうじよ）に於いて、先ず喝破して「ひそかにおもんみれば、難思の弘誓（ぐぜい）は難度海を度するの大船、無碍の光明は、無明の闇を破する慧日なり」と劈頭（へきとう）に於いて弘誓の大船、無碍の慧日（えにち）をかかげ、直に其船に乗じ、其日を仰ぎたる実験の事実をあぐる為に「しかればすなわち、浄邦縁熟（じょうほうえんじゆく）して調達（ちようだつ）闇世（じやせ）をして逆害を興ぜしめ、浄業（じようごう）機あらわれて、釈迦、韋提をして安養をねがわしめたまえり。これすなわち権化の仁（ごんけのにん）、ひとしく苦悩の群萌（ぐんもう）を救済し、世雄の悲、あまねく逆謗闡提（ぎやくほうせんだい）を恵まんと欲してなり」と云われたるを見れば、聖人が如何にこの実験的事実に、重きを置かれたるかを知るべきである。此の如くこの事実を重く見るときは、此の事実の下に、深き意義の横われてあることを、感ぜずにおられぬ。すなわち親鸞聖人は、この事実に関係している善人も悪人も、男性も女性も、大王も太子も、臣下もないし守門者に至るまでも、皆大聖仏陀の権化にして、吾人罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を救済せんが為に、人生の上に演ぜられたる一大活劇であると、信ぜざるを得ぬのである。しかし此の奥深き親鸞聖人の観察は、また吾人が現世に対する、深遠なる人生観を、生じ来る所以である。

吾人つら〳〵人生をかんがみるに、其行路崎嶇（きく）として、屈曲複雑をきわむといえども、ついには萬峰過ぎ

来りて茫々たる平地に達し、流水滔々（とうとう）として右に折れ左にめぐり、迂回を極むといえども、終には洋々として大海にそそぐが如く、人生は畢竟（ひつきよう）或は煩悶、或は罪悪、幾多の実験を経来たりて、最後に尽十方無碍の光明海中に帰入せしむる活劇たらざるものはない。此等の深奥なる我が人生上の実験をば「人生問題」の名の下に披瀝する考である。吾人はこの篇の結末として親鸞聖人が、この王舎城の悲劇を詠じたまいし和讃を拝読して意味深長なるを味わい奉る次第である。

いわく

弥陀釈迦方便して
阿難　目連　富楼那（ふるな）韋提
達多　閣王　頻婆沙羅（びんばしやら）
者婆　月光　行雨（ぎようう）等
大聖おのおのもろともに
凡愚底下の罪人を
逆悪もらさぬ誓願に
方便引入せしめけり

（歌集）　楢稚葉　柳瀬留治

常陸に旧蹟をたづねる親鸞聖人を偲ぶ

越後より何を縁（ゆかり）に東国の筑波山あひをとめ来ましけむ

時の府の鎌倉の地に遠からぬ常陸をこそととめ来ませしかあらくれの鄙（ひな）の人々思はざる聖（ひじり）の信に触れて泣きけむ

裏筑波起き伏す山のひまびまを化導なさしし姿目に見ゆ

通いましし山路といふや生ひかぶさり細々続く山たをの道

御性情熾烈なりけむ救はれし御喜びも烈しかりけむ

かかる己かくぞ救はるいかならむ悪逆罪も漏るるあらむや

折々に

傍へ人を越にゆかしめ八十二のわが親鸞のさびしくましけむ

一道会の記

榊原徳草

暫くして**白井先生**のお話をお願いした。その大要を先生は後日まとめて書いて下さった。次の通りである。

速くも一年をすぎて又一道会にお会いしました。けれども今日は花田先生が御病気でお見えにならないこと、寥しく感じます。ただ今承りました「大いなる受入れ」によって池山先生から浄土真宗の本意をお知らせいただいたこと、ありがたく存じます。

汝のこのごろの感じを述べよとのお指図でありますが、私このごろ仏伝を読んで居りまして特に次のような一節に心打たれました。お釈迦様が六年の苦行を捨てて菩提樹の下に冥想に耽られた暁、一切の魔軍をまつろわしめて、仏陀のお覚りをお開きになられた。それは如何にお歓びの事であられたか思いも及ばぬ事でありますが、そのお喜びをお独りで味わっておられた間に、お釈迦様のお心の中に譬えようのない寥しさが湧いてこられた。この悦びの境地はそれが余りに深いために他に誰にも伝えることができない、せっかく覚り得たこの境地も誰にも伝え得ないで自分ひとり世を去らねばならぬかというような寥しさであられたのでしょうか。このお悦びと寥しさとの中にお釈迦様はその辺りの菩提樹の樹々の下の座をあちこちと変えて冥想に耽っておいでになった。

その時に梵天王が現われてお釈迦様に向ってその覚られた覚りの法を世間にお伝え下さるようにお願い申上げました。その勧請の誠心に動かされてお釈迦様は終に覚りの法を世間に伝えようと決心なされて菩提道場を起って鹿野苑（ろくやおん）にお向いなされた。こうして仏法が世に弘まる路が開かれたのです。いったいこの伝説の中に現われてくる梵天王という神様は、恐らくお釈迦様の御心の中に何か問題が起った時に、それを解答された最も奥深い情意の動きを象徴的に表現したところから神話化されたものと思われますが、ともかく私はこの一連の伝説の中にひとり深い感銘をおぼえずに居られません。

お一人で始めて到達せられた深いお覚りの境地から遍く世間を御覧になられる、そのはかない、あさましい、けがれた有様、すべて無明の煩悩から流れ出て狂うている有様を御覧になられて仏様の御心は悲しみ憐れみに充たれなされた。それと共に、如何にかしてこの衆生をこの狂い悩みから救いあげ必ず私と等しい覚りの楽しみの境地に入らしめなければならないという大きい願いが潮の如く湧き起こられた。この境地を涅槃経に一子地（いつしじ）という言葉で云い表わしておられますが、この言葉は仏様の御心を顕わす種々の言葉の中で最も感銘の深いものであります。「慈（いつくし）みの眼をもって衆生をみそなわすこと平等にして一子の如し」と申されます。

ところがこの言葉を想いおこすと、私はいつも、お聖教に衆生という語があったらそれは私自身の事だと読まなければならないと告げて下さった師匠の言葉を想い起こします。それと同時に親鸞聖人の御語を想い起こします。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」

弥陀の五劫思惟の願という御言葉をすこしでも偲び出させるようにお釈迦様の菩提樹下道場に於ける長い間の御思惟があられました。その御思惟の中に頻りに未来の有情の苦悩の有様に御心を痛めさせられ、そして終に鹿野苑への旅に立たせられた。まことにそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召し立たれた一子地の御心の中を偲ばせて下さいます。この私の宿業深重なる身をよくもよくもお助け下さろうと思い立ちなされましたことよ。この御心一つ、母が子を懐くような悲しい温かい御心一つで氷の塊のような宿業の身が融かされてまいります。

そくばくの業をもちける身にてありけるを、というお言葉も年々歳々其の味を濃くしてまいります。生活の環境が異なってゆくにつれて、愈よ新たな煩悩が起ってきて私の宿業のあさましさにめざめさせてくださる。この世に生きる間は限りもない。その煩悩の一々、赤児の泣声の一々に母の情が牽かれるように、一子地からの仏様のお呼び声が響いてきて下さる。それによって宿業に砕かれかかる子の心が新たな生命によみがえらせていただきます。まことに南無阿弥陀仏のお呼び声はいつも崩れようとする私の生命を真実の一道に立たせて下さるお力です。

このごろ私は、お聖教の中によく空という語を見出します。色則是空、空則是色というように。この般若の哲理は私には余りに遠くしてよくうかがえませんが、ただこれを仏様の一子地からのお呼び声としていただくと、どうにか身に味わわれるようです。此世の一切すべて空しく、そらごと、たわごと、まことあることなきはかない相のもので

ある。己れの身に最も親しい父母妻子の上にいたましくもこれを感ぜざるを得ない。これを感ずると泣くより他に何も出来ない。そのときどこからともなく南無阿弥陀仏のお呼び声が聞こえてくる。そのお呼び声の中に、父母も妻子も一諸に居られて私を呼んでくださる。

私はこうしてお念仏に護られ亡き人々にも護られて、歩々新に生きてゆくことができるようです。仏教の空(くう)の哲理は深くしてわかりませんが、お念仏の教はそれをそのようにして私に生きさせて下さいます。恐らく万法の躰は空である、躰空なるが故に万法と現われ得る、名号法は私共の機に応じて私共に現われて下された最も親しい、最もありがたい、最も貴い法、一子地の徳の円（まど）かな現われと申してよろしいでしょう。

皆様のお大切な時間を長くお邪魔して失礼いたしました次いで**松本解雄先生**のお話の大要は左のようである。

今日は池山先生の三十四回追憶会でありますが、お亡くなりになったのは十一月八日でありますが、本年は十月二十四日になりました。先程から榊原先生、白井先生のお話、それから花田先生の録音を聞かせて頂いて「唯念仏」のお味わいを頂いたのであります。

私が池山先生に初めてお会いしたのは、先生が甲南高校から大谷大学に教授として来られた昭和四年の暖い春の日でした。花田先生を中心として親鸞聖人を讃える京都学生親鸞会という集りを毎月のように会場を変えて、今から思うとおこがましいような、信仰告白会というような名目で元気な集りをやっていた矢先きに先生が京都に来られたのです。私はそれから前後十年間、その間一寸帰郷もしましたが、榊原先生の云われたように、蓮華谷の先生のお宅を訪ねたり、講演会にお伴したりしてお教えをうけました。その間始終私がうけました印象は、何か従容として迫らずゆったりとした威厳、そういう感じをうけました。私など只今先生の御晩年の齢になるんですが、いつまでもせかせかして歩いたり、先生とは性格がまるで真反対です。

先生は六十七で亡くなられたんですから、甲南から京都へこられた時分はまだ六十になっておられない時です。京都寺町二条の鍵屋という御菓子屋の二階で、十数名がお茶とお菓子で先生の歓迎の集りを開きました。その時、夕方でしたが、我々二階でお待ちしていると、先生は鳥打帽でステッキを持たれてゆったりと来られる姿が見えます。急いでお迎えしたんです。

自己紹介のように一人一人が夫々にお話をし、みんなが元気な念仏を唱えておったものです。最後に先生が、突然芭蕉の〝古池や蛙とびこむ水の音〟を引かれ、諸君は若いが、みんなお念仏が出ている。古い池に行くと沼気が浮んでいるが、諸君の口から出るお念仏は遠く古い仏様の心から浮んでいる。今その念仏の沼気の浮かぶ古池に飛びこんだ蛙がこれから泳ぎはじめよう、といったことから始ってから、たまさかに如来に面す春の風、という御自作の句を言われて、甲南高校の学生だった先生の三男、幸吉さんの臨末に念仏申されながらやすらかに往生せられた顚末をお話し下さったのです。

その後いろ〳〵のことがありますが、先生はお念仏の世界と本当に融け合っているお生活で、四十二歳で御信心に徹せられて、文字通り信を行く旅人のお生活であられました。先生の悠容迫らない御人徳と申しますか、或は御信心のお光りと申しますか、それは何時も拝しました。それはたしか顕道会館の御講演の時でした。その頃はまだ人力車で会館へ来られましたが、その時に車夫の人が、今の人は一体どういう方ですか、あの人はただ人じゃないね、と我々の友人に話したということです。こんなことは何も知らない車夫の方が、先生の車上でお念仏していられる御様子に心うたれたんじゃないかと、「呼子鳥」（先生の追慕録）に谷大の先生が書いておられる。本多顕性氏が六高に行かれた池山先生の案内をうけた時、何か先生が口の中でブツブツと言っておられたが、あとでお念仏だったと気づいたと書いていられます。

そういうことによって先生のことを全然知らない人でも自然のうちにそういう信徳に驚いたのでありましょう。その昔、板敷山の弁円が聖人にお会いしてうけた感化も、単に後人の修飾したものでないということは、この事実によっても解ることなんでございます。

それから何度も繰り返しますが、先生について私の胸に深く刻まれていますことは、我々の法友、京大医学部を卒業、今度の戦争で軍医として沖縄で戦死された、林田さんの奥さんが亡くなった時の、あの先生の悲痛なお姿、あれは忘れることが出来ません。奥さんは京都女専卒業、新潟県出身で、女子親鸞会員の古川睦子さんといった人ですが、結婚してほどなく子癇で急逝されました。本葬は林田さんの郷里、兵庫県龍野町の郊外で私も会葬しましたが、京都では密葬でした。大谷大学のグラウンドの東の御宅で霊柩車が鳥辺山の火葬場に向う時に、先生は礼服を召されて、霊柩車をじっと見送っておられた御姿！これはどうしても、もう四十年も前のことですが、霊柩車が烏丸の角を曲って見えなくなるまで身動きもされないで見送って居られた御姿がいつまでもハッキリと悩裏に浮かんで来るのであります。

さて今日先生の追憶の集いに、最近私の感じておりますことを申上げましょう。これはお念仏によって夜明けさせ

て頂いた者は特に強く感じますことですが、私共が如何に信仰を頂いても、所謂煩悩熾盛の身でありますから、一方においては、先程白井先生もお話ありましたが、宿業に悩む血みどろの身で、宿業に泣く暗い面、どうしても拭うことのできない面があります。しかし只その暗さに泣くというんでなしに、それを契機、御因縁にしてそこをも一つ超えた、全くそれとは違った明るい面と申しますか、それが味わえるのであります。

聖人の仰せで申しますと「悲しき哉、愚禿釈の鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快（たの）しまず、恥ずべし傷むべし」とあり、又悲歎述懐和讃に「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし、……小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじ、如来の願船いまさずば、苦海をいかでか渡るべき」という暗い血の叫びがありますがその一面に「悲しき哉」に対して「慶ばしき哉、心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の厚恩を仰ぐ、慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し」とあり、帖外和讃に「超世の悲願ききしより、有漏（うろ）の穢身（えしん）は変らねど、心は浄土に遊ぶなり」というお喜びがあり、更に歎異抄第七章で「念仏者は無碍の一道なり」というような力強い確信に満ちた、心の底から湧きあがってくるお喜びがあります。

これは前の宿業に泣く真暗闇の面と全く違う、これはむしろ身にもつ宿業が、弥陀大悲の御廻向の名号、その本願によって、「転化」されるのです。先生の御真筆にもこの二字を書きのこして下さいました。自然、願力の自然として闇が転ぜしめられる、これこそが本当の御信心のお念仏の世界じゃないでしょうか。そういう天と地、二つの全く逆なものが、お念仏一つにとかされると申しますが、統一される趣きがあります。

先日琴平の毎月の慈光会の時に、手元にあった先生の「仏と人」「絶対他力と体験」あれをめぐって居ったんですところが今まで見おとしておりましたが「仏と人」の序文に「蓮華谷、遊林荘にて」とある。蓮華谷の御宅を先生が「遊林荘」と名づけておられることを知ったんです。これは申すまでもなく正信偈の「煩悩の林に遊んで神通を現じ」とあります、あれから思いつかれたと思うんです。

先程の花田先生の録音にもありましたが、お嬢様の御縁が遠かったことを御心配しておられ、実は私も或人を紹介しましたがこれは成立しませんでした。又御次男が思想犯で山科刑ム所に何年も居られたこともお聞きしていましたが、先生は、尤も私共が若かったせいでしょうか一寸もそ

うしたことをうかがっておりません。ただおぼろげに御推察した程度でしたが、恐らく先生のお書きになったものから察しますと、これは深いお歎きであったと思うんです。

例えば歎異抄第十三章、先生はあの宿業の所を引かれてすべては所謂宿業の然らしめる所で、私達は身心をあげてそれに繋がれているのだ。悲しい哉、私達は宿業の指図から一分一厘はずれることはできないのだとありますし、先程榊原先生が読まれた所にも、啄木の悲しきは飽くなき利己の一念をもてあましたる男にありけり、を引かれて深く御自身を見つめておいでになる。又宿業の身だということについても深い感懐をもっておられました。それを先生は私達に一言半句も漏らさなかったが、そういうことがあったのです。これは聖人の悲しき哉、或は小慈小悲もなき身というおこころとすこしも変りがないのであります。

ところが先生の色んな著述の中に先生のお歌など載っておりますが、例えば「われならぬきよらのわれのわれにありて穢悪のわれをわれにしらしむ」というように、お光りに照らされて逍遙された御自身をよろこんでおられます。或は「久遠このかた子故の廻向わたしひとりをかたおもい」と、こちらは知る力もないが、弥陀仏は飽くまでも何処までも、子故の廻向私一人をかたおもいとの御体感。或はまた「たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ」とあの深い宿業の中から無碍の光益を仰がれて、力強いお喜びがそこに滲み出ています。闇が転じて光明の世界に浮ばれているのであります。これは「仏と人」の中で二十一頁と思いますが「何ともいえない嬉しい安らかな大船に乗ったような、胸一杯の勝どきを挙げたいような、力強い、たのもしい心地、念仏を称えているうちにフト気がついた云々」と、こういうところもございます。

これなど正しく先程あげました「慶ばしい哉、心を弘誓の仏地に樹て、情を難思の法界に流す」という確固とした一つの世界がそこに出ております。このように親鸞聖人と先生が、七百年のへだたりはありますが、私思いますのに、聖人と先生と二重写しになってピッタリと一つもずれがない、そういう世界、それこそ、度々申しておる「ただ念仏」の世界ではないかと思うのであります。

結局、先生の御生涯というものが、煩悩の林に遊んで神通を現ずるの世界、ただ念仏にあって一つにされて、煩悩の林に遊ぶ、本当に遊ばれたんではないか。それが先生の日常の御態度、深い宿業を背負いながら、しかもそれが願力によって転ぜられた力強い足どり、「遊煩悩林現神通」「遊林荘」の先生のご一生のお生活の中に滲み出ているようにうかがうのであります。これで失礼いたします。

菅瀬芳英先生を憶う

西本清人

（註）菅瀬先生は明治五年七月、広島県の教蓮寺に生る。京都で文学寮で唯識（ゆいしき）、倶舎（くしや）を学び、その後叡山で天台を六年学び、後東都で同和学園を創設し、傍ら全国に巡錫さる。大正六年四月四十六歳、往生。

病中の句は

頑強の坊主も癌で願往生

○

菅瀬先生が示寂せられて今年（四十二年）で丁度五十年になります。御在世の頃仰言ったこと、せられたことを今省みますと、自分の考えの間違っていたこと、味わい方の浅薄であったことが知らされ、申しわけがないと思います。

私は健忘症で五十年も前のことは殆んど忘れておりますが、不思議にも先生の温容慈顔、あの髭の多いお顔、光る目を細めて笑みを含んで口を少し尖がらせて、こつこつと仰言ったこと、墨の衣に墨の袈裟のお姿は今に目の前に浮かんできます。

先生があのお姿でお浄土で待っていて下さるように思えてなりません

○

先生は十六歳から唯識、倶舎を学ばれて後、叡山で六年聖人のみ跡を慕うて廻峰行までして修行せられましたが、宗教上の学問のことは表に出されず、如来から頂かれた大悲を腹一パイに頂かれて、そのお味わいのままを人に語られました。話が上手な人でもなく、又文筆の人でもありませんでしたが、先生は唯御自分に頂いて腹一杯に燃えている大慈大悲の味わいを素直に話されました。それもご自身でお慈悲に感激せられて口にそれが中々出ないことがあった、そういうときは、話すよりはお念仏を称えていられる方がご自身にぴったりされたのでしょう、お念仏ばかり称えて居られました。そうした先生ですから、ある時はお説教の一座がお念仏ばかりで終ったことがありました。聴聞する人も先生の燃ゆる歓喜が念仏となって現われるので、それに同化せられて、いっしょに皆お念仏しだして終ったことがありました。

今からかえりみると、これは大変なことで、こんなことが出来る人が外にあるでしょうか。

○

先生の布教に対する熱意は超人的でありました。実業家の福間久米吉氏の入信問題ですが、同氏は癌で十数回手術を受けられて其間一年半に及ぶ間、毎週一回乃至数回、乗物もない道を本郷東片町から根岸まで徒歩で通うて、遂に福間氏も獲信し、その一家の人々も信心の人となりました。

その間普通の人であれば中断せられたであろうと思われる程困難なことであった。福間家でも本人はもとより家族の中には先生の来られるのを好まなくなって、時には塩をまかれたこともあったそうです。先生はそんなことには頓着なく、この一家が信にめざめることがお自分に課せられたご報謝であると考えられたのでしょう。遂に福間氏も念仏にめざめ、一家一族に信心の華が開けました。

○

明治中期から大正にかけてわが仏教界に沢山高徳の方がありました、前田慧雲、島地黙雷、島地大等（以上本派）近角常観の諸先生を始め浩々洞一派の有名な方々が居られました。然し菅瀬先生は余程型が変っていました。よく先生の話されたことに他の先生から注意せられたことがありました。例えば先生の語録にも出ております行誠上人ですが、行誠上人のお弟子が卵をたべて穀を膳の上に置いてあったのを他のお弟子がこれを上人に告げた。上人は「まあいい、世間では高僧知識をよそおうて魚を喰うて証拠を残さぬために骨まで喰うたものがある、それより正直でました」と云はれたと菅瀬先生が話された。

これは禅の人を誹謗することになるから、やめた方がよいと注意せられた。先生は注意された時は何もいわずに、うなずいて得心せられたようであるが、次にはまた同じことを話し、人間の五濁悪性の証拠の例に話された。

それどころか私はこんな話までされたのを覚えています。当時政府の要路者が軍艦を英国のシーメンス会社に発註して、その間で賄路を取った事件があって問題となったことがあった。それを例にして禅僧の骨まで喰うたのはまだやさしい、軍艦まで喰うものがいるという話や、又東京市にはバラスを喰う役人も居ると話された。

これも先生は頑固で人の注告もきかない一徹な性格だとして片付けてはならんと思うのです、先生は仏の大悲を話される上には何ごとも遠慮する必要はないという信念であったので実に尊いことであると思うのです。

○

私は学園には居ませんでしたが、伯父（西本浅太郎）の家から時々学園に行って先生の話を聞いたりお手伝いをしていました。先生は廊下を掃きながら、例のように念仏の

掛け声でやっていられ、私に「お念仏して掃くとこの廓下に仏縁が結ばれるからね」と語られた。その時は、先生は随分オーバーなことを云われるなあと思うて聞いていましたが、今となって省みると私共はお念仏を小さく軽く見ていたことを愧じています。如来より賜った真実の念仏は万善万行の功徳に満ち〳〵た念仏であると感じないのです。

五濁悪世の有情の　選択本願信ずれば
不可称不可説不可思議の　功徳は行者の身にみてり

○

広島の或素封家の子息を預って居られた時、その子息が放蕩者で自分のものを売ったり質入れして料理屋に居続けするのです。すると先生が親から金を送らせて借金を払うて連れ帰るのです。そして親の慈悲を説いて「二度とこのようなことがあってはならん、親はお前を真人間にしようと思うて引取って下さるのだ」といわれると「よく判りました二度と致しません」と誓うのです。でも暫くすると又やるのです。こんなことが度重なって先生も困られたことがありました。先生は私共に云われる「親の慈悲がよく判った、というが、それは、親はわしが悪いことをしてもどうにかして呉れるものだ、と云うことが判ったので、真にやるせない親の慈悲が判ったのではない。真の親の慈悲が判ってみれば、こう云うことをして親に心配かけてはならんと、わしを見捨てぬ親に感謝の心が出てこそ真の親の慈悲が判ったと云うものである。真の如来の大慈大悲に夜が明けたら、慚愧と感謝でなければならん」と教えられた。

○

或る時、先生が東京から広島に来られるので駅に迎えました。先生に「昨夜は車中よくおやすみできましたか」とお尋ねすると「それがネー、わしはこうやって車中で安気に眠っているが、多くの鉄道の人が少しも眠らず働いていて下さるからだと思うと有難うて〳〵お念仏ばかり称えて来た」と申されて、私はガクッとしたことがあります、今も思い浮んでお念仏させて頂いております。

その後の新聞に、ある軍人の宮さんが、東京駅につかれると当時の高橋駅長に「昨夜のこの列車の車掌は誰か、ストーブが暑過ぎて眠れなかった」と大変なお叱言をうけたと書いてありました。先生とこの宮さんとをくらべて深く教えられました。私共は気に入らぬことがあるとすぐこの宮さんのように不平不満になりますが、その前に先生のような生活の大切さを知らされました。

○

私は若かったので、先生は非常識なところがある。名利に恬淡（てんたん）で何ごとにも無頓着でしかも剛情で大分変った人だと思うて居りました。

それは学園の人も世間の人もそう先生を見ている人が多かったと思います。だがそれは先生の性格と云うより、先生はご自身に如来より賜った大きな宝を腹一杯に味わっていられて、ご自身の仕事は一人でもお慈悲が判って貰えばいい、それが唯一の自分の仕事だと考えて居られて、世間的なことは無頓着で、風采は勿論、金銭上のことなどもあまり意に介して居られなかった。

私共の日常生活を顧みますと全く先生とは反対に、名利追求を大切にし、如来より頂いたお慈悲、お念仏はすみの方におしやって居ります。だから不平不満な明け暮れを過ごしておりますことは唯々愧じるばかりであります。

○

先生の口腔内の癌が進行して重態になられ、命旦夕に迫られた時、近角先生が見舞われて筆談していられます。浅原才市同行が云ったように、如来の生肝（いきぎも）の正味の法話であります。その中に近角先生が

「報仏報土ということは、其時にあらざれば分らぬが、我等を憐愍して下さる御慈悲の塊に候、大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土というとの意味、どうしてくれるのか、往きて見ねば分らねど、飽くまで見捨てぬとの御真実が分れば、あなたまかせ〳〵」

これに対し菅瀬先生が

「あくまで見捨てぬお慈悲、往生を誓われた往生浄土が有難し」

と云うて居られます。実にきわどい御教化であります。近角先生の「どうしてくれるのか往きて見ねば分らねど、飽くまで見捨てぬとの真実がわかれば、あなたまかせ〳〵」この問答を見ますと、歎異抄の九章を拝するような気持がいたします。池山先生の「汝一心正念にして直ちに来れ」の意訳の「オネガイダカラ、スグキテオクレヨ」と如来より頭を下げてのお願いの文と比較して見ますと表裏一体の勿体ない御自督であり、私共に残された三人の御大徳の大悲信楽の極致のお言葉であります。

（終り）

× × × × × × ×

安心小話

源　通　寺

香山院師云く。御文に我身はわろきいたずらものなりと思いつめて、とある。これはもうすこしも相手にならぬこと。よくても悪くても目をかけず、とんと相手にならぬことを云うのじゃ。

○

私は年をとりまして三毒はいよいよ手強くなりました、どうしましょうと一蓮院師にお尋ねすると、若し三毒がなかったら極楽で三光かげた片輪な仏になるであろう、と。

噫、歎異抄の九章

松村繁雄

私は毎朝、桃林師の寺の梵鐘を撞かせてもらっておりますが、梵鐘には、正覚大音響流十方、南無阿弥陀仏と、太い文字で浮彫りにしてあります。そこで、一つには慚愧、二つには感謝、三つには歓喜、四つには仏法弘まれかしと念じ、五つには世の中安穏なれと願いつゝ力一杯に撞かせてもらいまして、私の家まで二十五分かかりますが、その道すがら胸にこたえるのは、歎異抄の九章であります

「念仏申し候えども踊躍歓喜のこころおろそかに候ことは又いそぎ浄土にまいりたきこころの候わぬは、いかにと候べきことにて候やらん云々」

唯円大徳のこのお尋ねこそ、まことに今日の私の姿であります。念仏は申しますけれど、梵鐘は撞くけれども口では歓喜というけれども如来摂取の光明を身にうけながら内心にはそれほどに嬉しいともありがたいとも思えぬ私。

池山栄吉先生は、南無阿弥陀仏は一心正念直来如来招喚の勅命であり、オネガヒダカラスグキテオクレヨ、とお味いになっている。スグキテオクレヨとは、親のふところに早く帰っておくれということであり、また、直来の来はきたるとも訓める、来ておくれよのまんまが、来て下さっていることであるともお味いになっていられます。

その如来の御真実心がとうとう届いて下さって、今現に私の口に、ナムアミダブツと現れて下さるのでありますのに、そのことはそれほどに喜ばずに、ラクをしたい、トクをしたい、勝ちたい、威張りたいとそればかりを願って今日健康で、安楽で、思うことがかなえば、それに有頂天になって、如来様の御恩は忘れ通しの私であります。また浄土へは急ぎ参りたい心の無い私でありますが、恰も猫が鼠に満腹して日和ボッコを楽しむが、自分の猫であることも、また一切衆生を護念して下さる如来の御恩には気づかないのと全く同じ姿であります。

こうした私共に対して、親鸞聖人は

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円坊同じこころにてありけり、よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに喜ぶべきことを喜ばぬにていよいよ往生は一定と思いたもうべきなり」

と、仰せられ、さらに御懇切に

「喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩悩の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられていよいよ頼もしく覚ゆるなり」

と、御述懐して下さるのであります。

天に踊り地に躍って喜ぶべきことでありますのに、それを喜べないのは、私が煩悩の塊の猫であるためでした。その猫であることをかねてお見抜き下さって、煩悩の塊の猫であるぞ、そのお前が不憫で捨てられぬ、と仰せられる久遠の親心の底をついたお示しであります。よろこぶべきことをよろこばぬにつけてもいよいよ煩悩の塊の猫としらされて、大悲のやる瀬ない御涙が頼もしいのであります。

聖人はさらに、人生の無常のことわりについて、

「また浄土へ急ぎまいりたき心のなくて、いささか所労（わずらい）のこともあれば、死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩悩の所為なり」

浄土に導き入れて美しき仏とならせようと待ちに待たれているのに、幻の浮世の快楽にのみ執着して、御親のましますす浄土にいそぎまいりたいと一向に思えない私の今日の姿というものは、煩悩の猫の性分がさせるのであります。その有様を聖人は

「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたくいまだ生れざる安養の浄土はこいしからず候こと、まことによくよく煩悩の興盛に候にこそ。なごり惜しく思えども、娑婆の縁つきて、ちからなくして終るときに、彼の土へはまいるべきなり」

持って生れた煩悩（猫の性分）は、どうしても捨てることが出来ませんが、その猫が、やがて娑婆の縁がつきて、万策つきてせんかたなく死にのぞむ時、その時私共は如来のさとりの世界に生れさせていただくのであります。

「いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたもうなり」

浄土のさとりをひらかしめようと待ちに待たれるみ仏のいます浄土に急ぎまいりたい心の無い私共を、ことに、とりわけても憐れと思召す大悲大願であります。

「これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知そうらえ。踊躍歓喜のこころもあり、いそぎ浄土へまいりたく候わんには、煩悩のなきやらんと、あやしく候いなましと云々」

海山の御恩を蒙りながら忘恩者の私共は喜ぶことも出来ず、また私共のために往生成仏せしめようとの大願成就の浄土も一向にまいりたい心のおこらぬ愛欲名利のとりこで

ある身を洞察されて、ことに憐みたもう弥陀の本願ぞと聖人が御身にかけて仰せ下さるとは、誠に頼もしいかぎりで往生の一大事も只今から大安心させて頂けるのであります

それにひきかえ、踊りあがるほどによろこべたり、また急いで浄土へまいりたいと思うこころがあったりすれば、煩悩がないのではないか、それでは仏様がかねてから煩悩具足の凡夫とお呼びかけておられる仲間からもれはしないかと、かえって往生も出来まいかと気づかわれるではないかと、ねんごろに聖人は仰せられています。

さて、聖人は、よろこばいでもよい、急ぎまいりたい心がなくてもよいと仰言るのでなく、天に踊り地に躍っても喜ぶべきことなのに、煩悩具足、煩悩興盛の身とて、そうしたことの出来ぬ点を見抜かれて、不憫に思うぞ、決して見捨てはしないぞとの仰せであります。

聖人の常の仰せに、

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ云々」

とありますが、まことに、どこまで行っても私は、煩悩の塊りの猫で、よしあしということにのみかかりはてて、如来の御恩ということをよろこばずに、迷いに迷うて、そくばくの業に縛られている私を、大悲のみこころからよびかけて下さるお念仏でありました。

大いなる慈悲の光りに納められ、み名来りませりな
ねてもさめても　　（三瓶徳英老師）

ねてもさめてもおよびずめの大悲の御手にたすけられるばかりであります。

これからも私は、いのちのかぎり梵鐘を撞かせていただきたいと思います。一つには、猫であることを忘れぬために、二つは、抱かれていることを忘れないために。

朝ごとにゴオンと撞かせたもうなり　この猫の手に
弥陀の御手は　　（昭和四十七年春）

× × ×　　× × ×

貞信尼物語

目の形もなければ鼻の形もなく耳の形もなくヤケボタみるような罪人を、弥陀仏はお膝の上に抱き上げられて

「悲しかろうがこらえてくらせ。あつかろうがこらえてくらせ。弥陀の正覚取った其時は、汝をさきがけに助けてやるほどに」

と仰せられては血の涙をほろ〳〵とおこぼし遊された、その涙のかかった衆生が弥陀の本願に御縁があるのじゃよ

念仏詩抄

木村無相

春の粉雪

春の粉雪が
舞っている
鬼ゴッコするように
舞っている

わたしも一諸に
舞いたいな
クルクル舞って
あそびたい
ナムアミダブツさまも
ご一諸に

だまって

だまって
だまって
だまって

にんげんのことばは
いらぬ

いま、ナムアミダブツさまの
お聞かせだ

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

人間万歳

人間万歳！
それなのに
ナゼにいじける

ナムアミダブツに、遇え
ナムアミダブツに、遇え
ナムアミダブツに

祝福されて
人間万歳！
しらなんだ
一念多念証文に
〃廻向は
本願の名号をもて
十方の衆生に
与えたもう御法なり〃

いまのねんぶ
ナムアミダブツ

本願の名号と
しらなんだ

わたしのためと
しらなんだ

与えたもうと
しらなんだ
歓喜というも
わしの苦労ばなし

なにになる
にょらいさんのご苦労
聞く一つ

〃聞其名号
信心歓喜〃

にょらいさんのご苦労
わしゃ歓喜

歓喜というも
ナムアミダ
よかったね
―じぶんに―
自殺しなくて
よかったね
〃いのちは法の
たからなり〃
生きていりゃこそ
法にも遇える
自殺しなくて
よかったね

四十六年三月十八日

信味点滴

花田正夫

世間虚仮・唯仏是眞

「天を相手にせよ、人を相手にするな」とは西郷翁の言葉として少年の頃からよく聞かされた。さすがに偉人の心境は違ったものだと感心ばかりして、自分にはとても出来ないこととあきらめていたが、或時友人から「あれは西郷翁が人のことが苦になってならぬので自分に言いきかせたものだ」と聞いて、成程と大いに得心した。

それにつけても自分自身の生活を省みると、何時も名利と愛欲に溺れて、人様のことが苦になってならぬ。お上手と知っていても賞められるとうかれ、そしられると腹が立つ。何時も相手の人の出方で心は動揺し続けて、六十八歳の今日まで性こりもなく繰り返している。

歎異抄の結文に聖人は

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」

と仰言っている。これはそのまま聖徳太子の常持語の「世間虚仮、唯仏是真」のこころである。世間とあるが、それは自分を、抜きにしたものではなく煩悩具足の虚仮不実な自分を中心としたあらゆる世間の不真実なものをとかして、真実に転化して下さる仏心への感謝の声である。聖人の常の仰せの「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」と同じこころである。

太子も聖人も規を一つにされて、唯仏の真実心一つをたのんで生涯を貫ぬかれたのである。しかしそれは、人を相手にせず、仏を相手にするというのではなく、人ばかりを相手にして愛憎違順（あいぞういじゅん）のやまぬ身、誰からも呆れられ捨てられる外のない身を、相変らず仏お一人がお相手して下さることのありがたさを渇仰せられたのである。

私が相継いで母と兄二人を亡くした時、愛別離苦の悲しみに沈んだ。その時、やさしく慰めてくれる友はよい人とよろこび、そうでないと冷い奴とさげすんだ。そうしたこ

とをくりかえしながら自分の心の動揺にうんざりした時、ふと本願の念仏に心をひそめた。この苦悩の底まで徹底して知りつくして下さって、そこに万人の如何ともするすべもないことをよく御理解下さって、その故にさしのべて下さる大悲の御手を体感し、末通った大慈悲者は阿弥陀仏お一人！と仰いで、迷い児が慈母のふところに帰ったような安らぎと喜びを味った。

かえりみれば、親とか兄弟に別れて悲しむのは人の常であるが、それも徹底して悲しむことも出来ず、その解決もないまんまに、その涙は時のたつにつれて出なくなる。独りみ仏は、生者必滅、会者定離のことわりをきわめたもうて、万人ののがれられぬこの悲歎を超えて、真実のさとりの道を見出されて、この道に帰れと切々としてお呼びかけ下さっている。

それなのに自分の浅薄な悲しみから、他人に同情を要求し、自分が他人様の愛別の苦悩に同情を持ったこともないくせにそれを要求し、一喜一憂していることの哀れさ、真実の大慈悲者を忘れて、他人様に仏様と同じ親切心を求めている自分の愚さも知らされて

愛別のかなしみ深し　ふかけれど
わがみほとけの涙きわなし

と腰折一首を作って、母と兄二人に別れた私の信の旅の一里塚にかえた。

親鸞弟子一人も持たず候

歎異抄六章にある有名な一句であるが、池山先生はこれをたたえられて、麗容の聖人、しんとんとろりと見とれるばかりであると云われた。弟子の無い人が弟子を持たぬというのであれば当然のことであるが、沢山の人々から恩師として慕われて居られる方が仰言るのだから驚く。その無我なお姿は、白雲悠々として流れ、その跡をとどめない趣きがある、等々と絶讃せられている。

さて聖人は御自身に悲歎述懐せられて、悪性さらにやめ難き虚仮不実の身であり、小慈小悲もなき身として有情利益などおよびもつかぬ身であると生涯を通して懺悔されている。ただかかるあさましき身を目当として離れたまわぬ弥陀の本願のたのもしさを仰がれて、御自身のよろこびを有縁の人々に頒（わ）かたれている。この聖人の法雨に浴する者が、自然に本願のおまことを頂いて念仏申すようになっていった。

しかし聖人としてはこの念仏者を「ひとえに弥陀の御催しにあずかりて念仏申しそうろうひと」と尊び、「御同行御同朋」とかしずかれている。

無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれども

弥陀の廻向の御名なれば功徳は十方にみちたもう

と、暗夜に月光が照り輝くのは、太陽の光明の返照であるように、弥陀仏の本願の名号のひとり働きと感得せられたのである。そこに、沢山のお弟子が出来ながら、わが弟子でないと仰言り、真仏弟子であると同坐して喜んで下さっているので、世間に云う謙遜というようなものでなく、そう仰言ることが本当で、わが弟子などと思ったら大間違いであると仰言っている。

聖人のこの信光に照らされて、仏物を盗んでわが身を肥やし、仏徳をわたくししてわが名利をむさぼる心のやまぬ私共は、聖人の御前に猛省一番、悲泣懺悔のほかはない。

弥陀の本願には老少善惡の人を簡ばれず

イダイケ夫人がわが子阿闍世のために夫君ビンバシャラ王が殺害されるという大悲劇の中に、仏陀の善巧に導かれて、夫人の心の闇は開かれたけれど、夫人は更に

「幸に仏陀の御力によって私のために浄業を修して下さる弥陀仏をまのあたりに拝し、有難い限りでありますが、未来の煩悩具足の凡夫の救いはどうなりましょうか」

とおたずねしている。それは、親殺しの大逆の阿闍世の救われる道はありますまいかとのお尋ねである。自分ひとり救われてもわが子がたすけられなければ安心は出来ないのが親心の常である。これに即応して観経の説法は続き、一切善悪の凡夫、ことに十悪五逆の悪人の救済の道が述べられると、イダイケ夫人ははじめて大歓喜の人となった。

又、聖徳太子は、伯父君の崇峻天皇を殺害し、横暴を極める閥族の蘇我馬子と共に国政の衡にあたられた時、太子の胸中は大苦悩におちられたことであろう。もし権力や武力で相手をおさえたのであれば恨みから怨みと修羅場がひろがるであろうし、かといってそのまま放任したのでは馬子の横暴はつのるばかりであった。

幸に朝鮮の高僧、慧慈法師を迎え、仏道を求められて、信眼がひらけ、憎い奴、邪魔者とのみ思っていられた馬子に対して「共に是れ凡夫のみ」と大反省せられ、「それ三宝によりまつらずば何をもってか枉（まが）れるを直うせん」、「人はなはだ悪しき者すくなし、よく教うれば従う」と、篤く三宝に帰依せられている。ここに太子は馬子と共に仏心の御真実におさめられてすくい遂げられることをよろこばれたのである。

更に法然聖人は、御父君が殺害される臨末に「父のために仇を討つな、相手も死にたくないであろうし、その子がお前を仇とねらうは当然である。どうか殺す者も殺される者も、敵も味方も共にたすけ遂げられる大道を得よ」との遺言によって、若冠十五の時叡山に登り、四十三歳の時、

善導大師の書に導かれて、老少善悪の人をえらばれぬ本願の白道にその願いが満たされたのである。

親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と常に仰言っているが、その一人の中に一切人がのこらずおさまっている。一切人が業縁に催されて織りなす罪業は、聖人もまた同じ業縁にふれると同じ罪業の身となられることをよく知られているそこに一人でもおすくいからもれる人があれば聖人御自身もお救いからもれ退転せねばならない。一切人の救いがあって聖人一人のおすくいも成就せられる、聖人一人のおすくいの中に一切善悪の凡夫のすくいの光りが満ちている、広大無辺の大信海、ただ仰ぐべし、信ずべし。芭蕉翁が

これはこれはとばかり花の吉野山

と、満開の吉野の桜を歎じているが、聖人の上に満開の信華を拝する。

何の世・何の人か是の法を貴ばざらん

聖徳太子の憲法第二章の中の一句である。太子はここに時代の如何を問わず、民族のへだて、貴賤の別なく、永遠不滅の仏道を尊崇せられている。

私自身この太子のお言葉が身にしみはじめたのは、福島先生、白井先生、近角先生、池山先生に教えられて、太子を慕う心をおこされ、ことに親鸞聖人の太子讃仰のおこころに導かれて、太子の三経義疏を素見し、太子憲法にふれるようになって、太子の仰せがすでに千三百年の歳月をへているのに、現在の私共の心にあたらしく生き〳〵として伝わってくることに驚いた頃からであった。

真理は普遍にして妥当なものとは誰しも知ることであるが、人々がさわぎたてる何々主義、何々思想というものは浮き雲のように現れては消え、或はのこっていても時代の垢にまみれてしまい、骨董品化して使いものにならぬものばかりである。万物は流転すと云った西哲の言葉通りである。唯こうした世に、仏語を金言と云うのは、金は時と処の変化によっても錆びがこない貴さがあるからである。

文化はおくれ、外に三韓との紛争が絶えず、内に閥族（ばつぞく）の争いが続く日本、文字通り混沌とした中にあって、この不滅にして普遍な大道に開眼せられた太子のおよろこびは如何ばかりであろうか？

さてこの太子のおよろこびの一端を味わうよすがとして大正十五年に胃癌で亡くなられた篤信の眼科医、安波勲八氏の信味を述べよう。

安波氏は御養父に勧められて仏縁を結び、東大医学部の頃から近角先生の御法話を聞き、別府で開業せられるようになってからは東陽和上に師事されて、篤信者となられた

方である。氏がある時「自分の求道の心は病的現象ではないか」という疑いが起って心の暗影となった。しかし自分としてはどちらでもよい、生理的であれ病理的であれ、自身の心の矛盾が解けて大安堵の生活が出来ればよいと思うが、他人に勧めるとなると、そこが問題である。

一見、求道の心は病的に見える。信仰を求める人の中には、病気、災難、不遇等人生の逆境にあって、身心の不調和から求める人が多い、して見れば問題を持たない人には不必要なのであろうか、と考えこまれた。

この不審を完全に解かれたのは専門の眼科の上からであった。近視や遠視や乱視はレンズで調整することが出来るが、万人共通の錯覚は病気でないからなおしようがない。それと同じように心にも錯覚があって、事物を決して正しく考えない。人間の死ということも、その原因があって死ぬので当然のことである。しかし近親、ことに自分や自分の子供の死の問題になると決して自然とは思えぬ。

苦にしても悪にしても、他人の場合は割合に冷静な判断が出来るが自分のこととなると身びいきな判断になってしまう。これは眼の錯覚と同様に万人が持っていてどうにもならぬ心である。

私共は絶対善の出来ないものが、絶対善をしたいと思いそれが出来ぬという矛盾によって朝夕悩まされている、これが人生問題の起る原因である。又極めて当然な自分の死を当然と思い得ない、しかも何とかして当然と思いたいのにそれが出来ぬという矛盾に出遭って生死の問題がおこるのである。いくら愚痴をこぼしても帰って来ぬ亡き子とは母は知っている。唯問題は愚痴をこぼしても駄目なことにくよくよして忘れることの出来ぬのが母の本当の悩みであり苦しみである。

この矛盾の解決されるには、そういう心の錯覚をもっていてどうにもならぬ者に全分の理解をもって、無理ないこと、のがれられぬことと同（どう）じて下さって、無限の慈悲をもって、お相手下さる方にあり以外にはない。

以上の結論に到着されて、仏の信仰は心の錯覚のやまぬあらゆる人々が聞かねばならぬ、心の錯覚は病的なものでなく万人共通の問題であることを明らかにされている。

ここに対社会的に積極的に仏法者は活動せねばならぬことが知らされるのである。

「万国の極宗なり、四生の衆帰なり、何の世、何の人がこの法を貴ばざらん。篤く三宝を敬え！」

と、万人に向って、末の代かけて、太子は慈心と確信に満ちて、法灯を高く掲げて下さっているのである。

あとがき

暖冬で凌ぎよいことでしたが不順なため風邪が流行しております、御用心の程を。テレビはニクソン訪中を大きく報じております、世界をあげて地すべり的変動が感じられますこの頃、篤く三宝を敬えと教えられた太子の御声が切々としてひびいてまいります。

× × ×

近角先生の懺悔録の結びを頂きましたが、御晩年の病中阿闍世の為に涅槃に入らずとの仏陀の金言を非常によろこばれて、これがそのまま歎異抄の九章と同じ大悲の至極であるとくりかえして話されました。

一道会の記は、白井先生と松本先生の感話を頂きました。白井先生は八句を越えられての信味で、人生の空を仏かねしてしろしめして、悲憫やるかたのない思召しを知らされますことです。松本先生は、池山先生の京都に移られてからお亡くなりになられます間、色々の御縁を得られて、親炙されましたままの感動を生き〳〵と述べて下さいました。

西本清人氏は菅瀬先生の五十年忌、昭和四十二年に、広島県の教蓮寺に記念碑を建てられ、小冊子をもって先生の御徳を讃仰せられました、お許しを得てその全文を頂きました。先生は四十六才で癌で亡くなられましたが、これからという御歳で惜しまれてなりません。仏教学者は沢山ありますが、仏法者の尠ない世に、稀れな存在でありました。

松村繁雄氏の歎異抄九章は数年前に一度頂きましたが、あらためて最近の信味を送って下さったものです。聖教は種々ありますが、実際の私共のありのままの生活に即して、力強く入り満ちて下さる大悲の至極を、聖人は身をもって語って下ったものであります。私共が仏に近づくのではなしに、一分一厘近づくことの出来ぬ身に、仏は聖人と現れて下さって、私共に同じ、私共を引接して下さるのであります。

木村無相さんの近信に「念仏詩は至って拙く、詩とか何とか言えるものではありませぬが、念仏虚空裡にひらめき消えた流星のようなもので、それをただメモするばかりであります。それを誌上であらためて味わわせて貰っております」とありました。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午后一時半。
南区駅町二ノ八八、一道会館、例会。
市電、新郊通り一丁目下車。
東入ル、三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前・午后。
昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電御器所通り下車。
市バス北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駅上町二ノ八八　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駅上町二ノ八八　慈光社
　　振替口座名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七

慈光第二十四巻第三号　昭和四十七年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可